名古屋大正期文芸雑誌考（五）

木下信三

野々部逸治の出発

大正八（一九一九）年の初夏、名古屋中學校の生徒である野々部逸治によって『ひとみ』が創刊された。『ひとみ』は短歌中心の文芸雑誌であった。

野々部逸治（幽水）は、明治三三（一九〇〇）年一二月、愛知県中島郡稲沢町陸田（現稲沢市）に生まれ、稲沢尋常小學校四年終了後、名古屋市西区の圓頓寺に入り那古野尋常小學校に転じた。第一高等小學校を経て名古屋中學校に入学。大正四（一九一五）年、圓頓寺を離れ実家に帰り実家から通学した。彼が『ひとみ』を発行したのは中学五年生の時期であったと思われる。

編輯兼発行人は愛知縣中島郡稲澤町陸田の野々部逸治、発行所は愛知縣葉栗郡北方村・岩田繁方のひとみ詩社、そして印刷人は名古屋市中区小林町一二の三浦荒一である。閲覧の同誌は第一輯、第三輯、第四輯、第七輯の四冊であるが、これらによれば編輯兼発行人は不動であるものの、発行所は第三輯より中島郡稲澤町・野々部幽水方のひとみ詩社となっている。なお、第三輯より売捌所として靜觀堂、白雲堂、山陽堂の書店名が見られる。雑誌サイズは縦横 195mm × 137mm。

「ひとみ清規」には〈ひとみ詩社はほんとに純な心を以て　藝術を愛する者の極めて自由な集りです〉とあり〈原稿種目〉として〈詩歌、評論、創作、小品　すべてが自由です〉（第三輯）と記されている。

また、第一輯「編輯後記」において野々部は〈初夏の頃ともなると、あの緑陰に建つ洋舘の窓から、異國少女の凉しいひとみが覗きます、そして青い小鳥の唄が聞えて來ま

す、あゝ希望にみち滿ちた「ひとみ」よ、お前は何に憧憬れ、何を夢見てるんだ〉と青春の心情をしたためた。次に閲覧四冊の主要目次、発行年月日などを紹介する。なお、第一輯は一部の詩篇を除きすべて短歌作品である。

第一輯　大正8年6月12日発行　16頁　10銭

岩田繁「桑きざむ音」一二首、淺沼渟「鐵道工夫」一二首、若野津雨「病中抄」七首、中村荻花「小鳥」七首、「緑蔭集」―秋田愁人・六首、菊池紫星・三首、久野比呂美・三首、澤露草・三首、木村瞬間・二首、若林芳葩・二首、副田夢星・二首、吉野白水・二首、不二原白鷗・二首、稲田ひろし・二首、土屋壽仙・二首、富田珍哉・三首、安藤曲浦・五首、黒澤精一・六首、高田桂舟・七首、石川翠園「タベの風」五首、清水待雨美「月に泣くわれ」四首、稲田緋桃「淋しき夜は」四首、大宮穂芳「生の叫び」一二首、野々部幽水「ふるさとの町」一二首／詩篇―若野津雨「さまよへる人」、篠田白果「蟲螢の光」、菊池紫星「病める兒」「編輯後記」、「ひとみ詩社清規」、表紙・田中みどり

第三輯　大正8年8月20日発行　22頁　10銭

伊織塑麿「薊の花」短歌三首、加藤英一「生活斷片」随筆、鷲野飛燕「旅の歌」短歌五首、桑原白灯「鮎と胡瓜」短歌八首、大宮芳穂「短歌日記より」短歌一三首、平井うしを湖「篠鳥の旅」短歌一二首、野々部幽水「懊惱と寂寥」随筆、西川紫浪「黙り男と烏」小品、楳樹美夕路「烏に」詩、加藤英一「おもひで」詩、平井うしを湖「初戀人は忘られず」詩、竹田血汐「戀の小唄」短歌四首、加藤幽美「縁日の夜」短歌六首、加藤英一「夜となれば海　薄暮衰曲　砂丘」詩、藤原深山「紫の山脈」短歌七首、伊藤曉峰「淡き戀」短歌三首、高田あきら「ダリヤ」短歌五首、小川濱路「惨ましき生」短歌七首、岩田繁「どうでもいゝ子だ」詩、吉野白水「夕雨の街」短歌四首、勝野小ゆき「夏の夜に」短歌四首、澤つゆ草「戀」短歌五首、稲田緋桃「降りしきる雨」短歌四首、石原かほる「寂しき心」短歌三首、松本象「本石町角」短歌一三首、野々部幽水「深山嵐」短歌一三首、うしを湖「夜更けの原にて」小説、平井生・幽水「編輯後便」、「ひとみ詩社清規」、カット・ゆかり生

第四輯　大正8年9月12日発行　26頁　10銭

加藤英一「手紙の來たある一夜」小説、鷲野飛燕「夜寒小景」短歌六首、鷲野和歌子「庭の木かげ」短歌六首、鈴木良生「秋風吟」短歌五首、高田あきら「秋の夜」短歌五首、林京平「伊吹紀行」短歌五首、大和玉椎子「愁傷の憂」短歌五首、加藤英一「ある夜」詩、平井うしを湖「秋は悲しい」詩、鈴木美夕路「波に戯るる子ら」詩、野々部幽水「啜り泣く魂」詩、藤原深山「山家に遊びて」

短歌五首、岡崎尚郎「雑詠」短歌三首、清水待雨美「熱き血」短歌三首、加藤英一「秋日小情」短歌五首、平井うしを湖「初秋哀歌」短歌五首、岩田繁「深山路」短歌五首、野々部幽水「雨後の街」短歌五首、岩田繁「小曲」詩、平井うしを湖「魂の碎けた夜」小説、平井生・U水生「後記」、「ひとみ詩社清規」、表紙絵カット・古田昂雄

第七輯　大正9年3月5日発行　22頁　15銭

鷲野飛燕「事務室の窓」短歌九首、平井うしを湖「或る日の猫と私」短歌一一首、高田あきら「京の思出」短歌一〇首、川口よしを「風」短歌六首、澤つゆ草「初春」短歌七首、山本芳洋「春を待ちつつ」短歌五首、美代子「知り得ぬ惱み」短歌五首、安藤青葉「雜詠」短歌五首、安藤曲浦「ふゆ」短歌五首、稲垣緑水「牧童」短歌五首、水谷となみ「斷面として」短歌六首、吉田千代「小女の歌」短歌六首、橘友孝「百人一首隨感抄（一）」研究、鈴木美夕路「幸の分配」詩、平井うしを湖「おびえ」詩、飯田章朗「木がらし」短歌四首、伊東曉村「感謝」短歌三首、加藤紫水「京の冬」短歌四首、勝見志石「初冬」短歌三首、眞殿奎峰「須磨所見」短歌三首、河田しづね「戀慕曲」短歌四首、榊原眞砂子「月の夜」短歌三首、伊藤榮「冬の夕べ」短歌三首、川口樂天「さすらひの旅」短歌四首、津川光露「木枯吹く夕」短歌四首、美代子「秋の山」詩、野々部幽水「まぼろし　緑の野」詩、春田鑛一郎、「琴の音」短歌三首、無井白蓉「冬」短歌四首、藤原深山「十字路」短歌三首、岩田繁「ふるさとの家」短歌一〇首、野々部幽水「雪の河原」短歌一〇首、水「編輯所便」、「ひとみ詩社清規」

まず、編輯兼発行人の野々部逸治の随筆「生活斷片」（第三輯所収）の一節を引用する。

今私の頭を一杯に占領して居るものは、刹那の眞實と云ふ事である。全人的合致であるとか、刹那の眞實とか云ふ事は何も事新しく私が主張する迄もなく、岩野さん等によつて屢々稱へられて居る事であるが、私が刹那の眞實の尊いと思ふに到つた根柢は、人間生活の原流――變な話だが今適當な言葉が見付からないから――は過去の純眞な自己經驗の擴充であり且インスピレーションによつて受理する眞理であると思ふからである。

歌人として出発した野々部逸治、その短歌を第七輯所収の「雪の河原」より三首引いてみる。

冬の月冴えて白々照る河原ひとりしたてば靜心わく
只一人晴れたる晝を教室の窓に眺むる雪景色かな
蒼々とたゝへし沼の底深く星影すみて粉雪ふるなり

野々部逸治はやがて短歌より詩の世界に移行し、その才幹を縦横に発揮する。後年、日本の近代詩史において高く評価されることになった、井口蕉花、春山行夫らの詩誌『青騎士』に参加し、さらに中山伸、高木斐瑳雄らの『風と家と岬』に加わり編輯発行人となった。そして、名古屋詩壇におけるエポックメーキングな詞華集『東海詩集』の編輯委員になり、大正末年から昭和初期にかけて詩誌『新生』の編輯発行人として活躍した。しかし、昭和四（一九二九）年一一月、数えの三一歳をもって病逝した。

野々部逸治は中学卒業後、名古屋通信社に入社し市井通信記者として活躍したが、『ひとみ』同人の平井うしを湖（潮湖）もまた同社の記者であった。また、鷲野飛燕、鷲野（花岡）和歌子夫婦は、明治四一（一九〇八）年に創刊された歌誌『八少女』で活躍した歌人である。

安藤青葉の『文藝通報』

『ひとみ』のような短歌中心の文芸雑誌は、当時、まだいくつか存在したもようで、たとえば大正八（一九一九）年九月に久保川庄次郎（名古屋市東区鍋屋町一丁目）によって創刊された『滄浪』（滄浪詩社）や、やはり同年の秋（第二輯は大正八年一一月発行）に創刊されたと推察される『漂泊』（名古屋市東区槿木町三丁目・漂泊詩社）がある。

そして、短歌ならびに俳句を中心とした文芸雑誌には『はくせい』（名古屋市中区裏門前町一丁目・はくせい社）がある。同誌は第二巻第一号の発行が大正九年一月であるので大正八年の創刊と見做され、「投稿規定」には小説、評論、感想、詩、短歌、俳句などが挙げられている。

ここでは大正八年一〇月に創刊の『文藝通報』を少しく紹介する。閲覧の同誌は第一巻第二号と第二巻第三号の二冊である。編輯兼発行人は安藤青葉（甚兵衛）、発行所は名古屋市南区東町横田二〇番地・安藤方の文藝通信社。騰写印刷。次は主な目次内容である。

第一巻第二号　大正8年11月1日発行　21頁　12銭

伊藤紅雲「許嫁の矛盾」小説、金尾まきは「遠い昔の夢」詩、高師静子「小曲」詩、山下信一「出奔」詩、山下幽谷「波の音」小説、高師静子「思想の煩悶」感想、淺田英舟「月の夜」小説、「雑吟（俳句）―曉花・三句、森田重雄・七句、中村英二・一句、森田五來「夜の郊外」詩、「短歌」―大和玉椎・五首、葛城馨子・五首、中村英二・四首、笹原賤夫・六首、幽冏生・四首、高士曉花・四首、山下幽谷・三首、高木東茂二・一首、山本萩浦・二首、藪内正義・六首、安藤夢川・三首、二葉女・五首、高師静子・三首、石樽嘯雨・二首、森田重雄「情緒に抱きつゝ」随筆、

安藤青葉「雑詠」短歌一一首、「誌友のおとづれ」、青葉生「編輯後記」、「文藝通信社規則」

第二巻第三号　大正9年3月1日発行　25頁　17銭

吉田迪男「過去の幸福」小説、伊藤紅雲「女性の涙」小説、兵藤壽香「馬賊銃殺の記」小説、高師静子「その夜」小説、淺田英舟「弱者の戀」小説、森田五成「發明家の運命」小説、笹原賤夫「後れ咲きの薔薇」詩、吉田迪男「或日の幻想」詩、淺田英舟「樂園の小鳥」詩、高橋與市左衛門「京都桂の郷」詩、山下幽谷「鐘の響」詩、石榑嘯雨「追悼歌」詩、はる雨歌路「ある女」短歌七首、森山翠嶺「短歌日記の中より」短歌六首、吉田迪男「登別温泉」短歌六首、高士曉花「春の來る頃」短歌六首、渡辺直太「偶感」短歌四首、河田靜音「この頃のわれ」短歌五首、山下幽谷「春の歌」短歌三首、瀧波巖村「春」短歌三首、石榑嘯雨「淺間温泉にて」短歌五首、安藤青葉「徒然の歌」短歌八首、「俳句」―淺田英舟・九句、石榑嘯雨・五句、瀧波巖村・二句、吉田迪男「淺春囈語録」雑記、「通信」、安藤青葉「編輯後記」、「正規」表紙絵・伊藤紅雲

第二巻第三号の「投稿規定」には小説、小品、書翰、散文、詩、短文、短歌、俳句などが投稿対象に挙げられている。また「正規」には〈文藝通報社ハ同好者ノ自由結集ニシテ文筆練磨ノ羅針盤也〉とある。また同号「編輯後記」には〈早いものだ、この文藝通報が産声をあげたのは昨年の十月であったから恰度今月で半ケ年になる。六冊ならべて見ると幼い雑誌乍ら順次的に発展して来たかのやうに思はれる〉とあって、同誌が大正八年一〇月に創刊して以来、休まず月刊誌として続刊してきたことが判明する。

編輯兼発行人の安藤青葉については何も分からないが、既述の『水郷』に「夕暮」と題して短歌四首を発表していたのが思い出される。次は第二巻第三号掲載の安藤青葉「徒然の歌」所収の三首である。

風早の堤に立ちつ沖見ればすさめる波に船はゆれつゝ
指さしつこまかに道を教ふれば人はうれしみ行きにけるかも
小さければとわがいたづらをこゝろよくゆるしたまひし伯母は今亡し（幼時を偲ぶ）

大正一〇年発行の諸雑誌

大正一〇（一九二一）年四月一日に『第一歩』第四号が発行されている。〈毎月一回一日発行〉とあるから、大正一〇年一月一日付けの創刊だったように思われる。

同誌第一三号によれば編輯兼発行人は愛知縣知多郡成岩町字郷中二二六番地の本美鉄三、発行所は同所の第一歩社、

印刷人は知多郡常滑町の佐藤六治（常滑印刷所）である。雑誌サイズは縦横 358mm × 195mm という大判。

編輯兼発行人の本美鉄三は長司春湖の名で明治期から活躍した歌人。明治二二（一八八九）年、知多郡大野に生まれ、高等小学校卒業の後は家業の織物業にたずさわった。大正期、知多郡成岩町の本美家へ養子縁組した。明治四一年四月、『明笛』（のち『SEA SIDE』として再興し『尾三文學』と改題）を創刊し、大正期にはこの『第一歩』を発行、その他多くの雑誌で活躍。昭和七（一九三二）年に短歌誌『歌壇風景』を創刊した。『明治大正歌書解題』、歌集『落暉』、『歌壇風聞記』などの著書がある。

ところで、閲覧の『第一歩』は第四号の一部と第一三号のみ。その概要を次に記す。第四号は前記のごとく大正一〇年四月一日発行。同号目次には次のようにある。

尾崎楓水「博く愛することは悪か」、尾崎楓水「親驚を愛するまで」、與謝野晶子「薔薇の歌」、與謝野寛「花より人に」、淺野梨郷「あたたか」、鷲野飛燕「春の深雪」、矢澤孝子「郊外漫歩」、青木穠子「少女の國」、鷲野和歌子「蕗の薹」、花岡桃崖「今日も今日とて」、三田澪人「或人へ送る手紙」、長司春湖「冬から春へ」、猪銅俊二・カット（凸版）、猪飼俊二「三井寺」（寫眞版）、與謝野晶子「歌」（寫眞版）

與謝野晶子「薔薇の歌」から長司春湖「冬から春へ」までは短歌作品のように思えるが事実は不明。本美が筆名として長司春湖を使用していることが注目される。次に第一三号（大正一一年一月一日発行）の主な内容を紹介する。同号は特価三〇銭であるが普通号は一〇銭である。

尾崎楓水「憧々として嬰兒の如く」随筆、楓水「屠蘇恍爾」随筆、淺野梨郷「トルストイの先驅者としてドストエフスキー」評論、中島慶治「愛の心持について」評論、龍居松之助「爲政者を笑殺した江戸の戯作者」評論、白石實三「途上」小説、與謝野晶子「冬の薔薇」短歌一〇首、青木穠子「シエリーの『雲雀のうた』より　一」訳詩、尾崎楓水論（中島慶治・柄澤廣之・田中仙丈・若山牧水・小林橘川・筧潮風・淺野梨郷・青木穠子・亀山半眠・飯田美稲・尾崎千代野・中島花楠・小木曽旭晃・三田澪人・石田元季・鷲野飛燕・他二二名）、長司春潮「冬日抄」短歌一三首、尾崎楓水年譜㈠、清水芹畝「友だちへ」随筆、中村稲葉「無限の統一へ」論文、中央洋畫會最初の試み、広告種々

以上の目次内容から本美鉄三が尾崎楓水（久彌）をいかに高く評価しているかが推察されるというもの。與謝野寛、

與謝野晶子、若山牧水らの寄稿は尾崎の仲介によるものか。第一三号所収の長司春潮の短歌二首を引く。

鰯網大漁をいのる赤旗は今日もなびけり夕凪の海
はたはたと帆のはばたけば雲ひくき港の入江夕霙すも

さて次に、大正一〇（一九二一）年六月一〇日に創刊された『破邪』について。同誌の「寄稿小規」欄に短篇小説、長詩、短歌、俳句が挙げられているものの、閲覧の創刊号ならびに第二号（大正一〇年八月五日発行）には、小説は掲載されていない。発行兼編輯人は名古屋市中区東橘町の後藤正義（蘋葉）で、発行所は同所の名古屋藝術社。同人は池山かずを、伊藤溪石、山内清三、小原澄、後藤蘋葉、綾小路正義の六人。

「清規」には〈名古屋藝術社は新しき藝術の研究と創作を目的とする結社である〉と明記され、後藤蘋葉は「稲輯便り」において〈本誌の目的は飽く迄眞面目に郷土藝術刷新の為めに努力するのである〉と発言している。また同欄には〈本誌の前身とも見る可き物は今春發行して来た『潮』である、その『潮』は同人間が二派に別れ（双葉紙上に發表さられたからこゝで書くことはこのまない）編輯上面白からぬ為解散をして私達は藝術社に合併をしました〉とあるので、『破邪』以前に『潮』があり、当時『双葉』という雑誌も存在したらしい。

中心人物の後藤蘋葉は歌人として活躍したらしく『破邪』第二号所収の綾小路滿佐好「中京文壇の印象批判㈠」には〈多士儕々たる間に後藤蘋葉君の近時の活躍は活目に價し、**コマドリ**誌上に少からず作品を發見す〉と記されている。『コマドリ』は大正九（一九二〇）年に後藤東一（東甫）によって創刊された短詩形雑誌で、同誌に蘋葉は幾多の短歌作品を発表している。

『破邪』と同じ年に創刊されたと推察される文芸雑誌に『若き憧憬』がある。閲覧の同誌第三号は大正一〇（一九二一）年六月二二日の発行で、発行所は名古屋市西区北野町一ノ三・渡辺方の若き憧憬社、編輯兼発行人は白鳥浪雄、印刷人は伊藤俊蔵、謄写印刷である。雑誌サイズは縦横230mm × 160mm、三二ページ、非売品。次は主な内容である。

尾崎楓水「某生へ送る手紙」小説、白鳥浪雄「或る夜」小説、永坂孝一「矛盾か不可解か」小説、船戸徹二「風呂場と雪蔭の藝術」随筆、FT・白鳥「編輯後記」、白鳥浪雄「第二期を踏まんとする我等同人」小文、「激」

「編輯後記」の〈尾崎先生から原稿を載いた事は、私等に取って愉快である。先生に謝して置きます〉や、「激」

欄の〈会員諸氏の住所を発行所まで夏季休暇前に御通知下されたく／次号原稿〆切第一学期試験終了の日〉などいう記事から、『若き憧憬』は既述の『伴天連』と同じく尾崎楓水（久彌）の関係した愛知一中かどこかの学校の生徒たちによって発行された文芸誌だったのかもしれない。

「編輯後記」には〈次号はいよ〳〵、若き憧憬の終焉を記念し併せて再発を一轉割する意味に於いて若き憧憬の廃刊を出す。約倍大にする豫定で今まで失敬した所の原稿は出来るだけのせたい。／而して九月一日を以て若き憧憬から一歩段を異にした所の文藝同人雑誌を活版で創刊する事になってゐる〉と記されているが、果してその言のとおり新規活版文芸誌が発刊されたのか否か、不明である。

また、これらと同じころ発行された文芸誌に、『耕す人』がある。大正一〇（一九二一）年一一月二五日の発行、発行所は名古屋市西区泥町三丁目の耕人社、編輯兼発行人は立川克捷、印刷人は名古屋市西区江川町三丁目の小野田松齢（三秀社印刷所）。雑誌サイズは縦横235mm×158mm。二六ページ、定価二五銭。次は創刊号の主な内容である。

白水『歸る迄』小説、中川良吉「不幸の前に」小説、瀧澤一雄「巡禮　思ひの炎　落紅葉　五月雨　私の快走船」詩、結城英夫「夏は去る　ほゝえみ」詩、森川韻朗「葬式の日に　僧院の初秋」詩、白水「星を仰ぎ見つゝ歌ふ　チ〇〇鳴く虫　何故か？」詩、三浦牧笛「茶山花　行く秋」詩、雑賀羊歌「秋風抄」短歌九首、獨居士「刹那の美感」随筆、中川・立川「同人偶語」雑記

この目次を一覧して編輯兼発行人。立川克捷の名による作品がないことに気づかされる。あるいは小説と詩作品を収載する白水が立川の筆名なのか。「同人偶語」において立川は彼の芸術観について〈僕は僕の精神的依頼として藝術を選んだ。僕は其の力を信ずる毎に生活と言ふものが非常に力強いものに思はれる。けれども僕は藝術の力を唯に作品を書くのみとは思つては居ない。藝術の窮極も結局信ずると言ふ事に歸着するらしい〉と述べている。

同誌巻末に〈十二月號原稿〆切／十一月三十日限り〉とあるものの、第二号以下については確認していない。

なお、大正一一（一九二二）年あたりに『中京文壇』という文芸誌もあったようであるが、これは未見である。

育英文藝の會と『燃燒』

名古屋市東区松山町二四番地の育英文藝の會発行の『燃燒』第三号がある。大正一一（一九二二）年九月一日発行、発行人は名古屋市中区矢場町三ノ切一〇の落合茂、編輯人

は南区熱田中瀬町西一の丹羽安信、印刷者は中区矢場町五ノ切五〇の笹岡忠五郎（笹岡活版所）である。雑誌サイズは縦横226mm×152mm。本文五六ページ、定価三五銭。

発行所である育英文藝の會の住所・松山町二四番地（現・東桜二丁目）には、当時、名古屋育英商業学校があった。東区総合庁舎建設後援会発行の『東区史（名古屋市）』（昭和四八年八月発行）には同校概歴について次の記載がある。

松山町にあった「名古屋育英商業学校」は、初め、「夜間育英学校」として明治41年に発足したのである。当時愛知一中の校長日比野寛が不遇な者の育英を提唱し、小川文雄、田代信時、高橋期文の賛助を得て設立されたものであった。／それが大正9年第一次世界大戦後の社会的要請として商業知識を有する求人が多くなったことから実業科を分離し、昼間の商業育英学校として開校された。続いて大正11年日比野寛が自ら校長に就任し、校舎も二階建てに改築、育英商業学校となったのである。

大正一一（一九二二）年七月発行の『愛知教育』には、同校の広告が掲載されており、〈現在生徒数三百名・修業年限四ヶ年・特色、時代の要求せる少壮商業家を教養せんとす〉という文字が記されている。

発行人の落合茂、編輯人の丹羽安信は育英商業学校の卒業生である。『社会詩人』復刊第一号（昭和三一年一月発行）の巻頭に掲げられた鈴木惣之助の「「社会詩人」の沿革」には〈「社会詩人」の中心となった創始者、即ちぼくと落合茂は共に明治三十六年生れでちょうど風雲急な日露戦争の前夜である。高等小学校を経て大正十一年三月共に名古屋私立育英学校を卒業した〉と記されてあるので、この『燃焼』第三号は落合の同校卒業後およそ五ヶ月後に発行されたことになる。落合茂については杉浦盛雄著『名古屋地方詩史』（昭和四三年一〇月発行）に次のような記事が見られる。

落合茂は明治三十六年名古屋市に生れ、名古屋市育英商業学校卒業後、先代落合兵之助の遺業を継いで日本金液株式会社に入り、金液ラスターを我が国で初めて完成、日本陶業界に大きく貢献した。同社の社長に就き業界で活躍したが、昭和四十年五月十七日急性心臓衰弱のため千種区山門町の自宅で死去、行年六十三才であった。

彼は十七、八才の頃から文学に志し詩作を始め、大正十一年四月、鈴木、丹羽等と名古屋文芸会を結び『燃焼』を発刊、三号を『平凡』と改題して休刊した。（後略）

この文中に〈名古屋市育英商業学校卒業後〉とあるが、育英商業学校は前記のとおり私立の学校。また〈大正十一

年四月、鈴木、丹羽等と名古屋文芸会を結び『燃焼』を発刊、三号を『平凡』と改題して休刊した〉とも記されているが、『燃焼』第三号は『平凡』と改題されてはいない。ただ「編輯室より」には〈「燃焼」も九月號から、内容外觀共に改められるやうになつた。まだ不滿な点も多々あるけれど、だんだんと努力して行かうと思ふ。たとへ吾々は微力であらうとても、正しい文藝、ほんとうの文藝に向つて、一身をさゝげたいと思つてゐる。此度の改革で本誌もその基礎が確實に發刊し得るやうになつた〉と記されている。何か大きな改革があったことは事実らしい。

また、この第三号に限っていえば、鈴木惣之助の名はどこにも出ていない。はたして鈴木は『燃焼』発行に参加したのであったろうか。同号からはその確証は掴みえない。なお、杉浦盛雄の文章によれば、どうやら『燃焼』は大正一一年四月に創刊されたように推察される。

『燃焼』の編輯を担当した丹羽安信は育英商業学校卒業後、新愛知新聞社に入社、映画評論家として活躍した。同校卒業生にはこのほかに詩人の伊藤耕人、浅野紀美夫らがおり、また次に紹介する第三号目次にみる人々も卒業生ならびに同校関係者と見做してよいのかもしれない。

尾崎楓水「朧夜の巻」脚本、マチルド・セラオ作・成田謙次郎訳「いのち永かれ」小説、ふゆのひとは「もの思ひ」詩、中島慶治「泰西文壇小話」評論、丹羽安信「線路工夫」詩、TEIJI「若い日のノートより」感想、小川浩一「青い室から　桃色の街」詩、長司春湖「東北の旅にて」短歌七首、落合しげる「孤獨」詩、滿留谷みづき「青春の日に」詩、松岡悌治「怪しげな浮浪者の群に」詩、夕葵塢「怖き」詩、浩一「その時から」詩、渡邊伊三郎「全體主義の序曲」小説、丹羽安信「或る處女」小説、安信「編輯室より」、松岡悌治「星の瞳」表紙絵、猪飼俊二「船着き」挿絵、広告―「厥美」、「人並の心」、港座、「江戸軟派研究」

次は落合しげる（茂）の詩「孤獨」である。

晝といふ／現實の扉が
夜といふ／感覺の色に閉ざされて
すべてが／靜寂に歸り行く時
私の心は段々と乱れて行く

夜の神秘の中に／淋しい―悲しい
感激に充ちた心で／何度も……其して又何度も
深い溜息をついて居た
眞闇、暗黒、靜寂は續く
その中で／何物かゞ蠢く

それが自分の／心のうごめきなのか
さびしみはます／深夜の孤獨

次に編輯人丹羽安信の小説「或る處女」の文体の一端を瞥見すべくその一節を引いてみる。

恐らく比の世の中に人間程、妙なものはなかつた。そして得手勝手なものはなかつた。それはしらず〳〵ではあつたが、あゝして殆んど毎日の様の遇うて居る間に、靜江の心の内部には、もう並々ではなく、特別の神意とでもいふ様な、ある譯の分らないものが、素晴らしい力でもつて働くやうになつた。すると別段そんなにでもないのに、道で出會ふ時等には、あの學生が特別の微笑でも送る様な心地がしてならなかつた。そしてよく讀んだことのある戀物語の場面等が思ひ出されて來てならなかつた。（ひよつとしたら、あの學生は、否學生の瞳は私に向つて何か語つてゐるのではないかしら。そして……）こんなこと迄靜江の心の中には考へられた。ともう靜江には謂ふことの出來ない嬉しさがわき起つて來るのだつた。

同号には尾崎久彌の一幕物「朧夜の巻」が掲載されており、また巻末には彼の高名な個人雑誌『江戸軟派研究』の発刊予告広告が見られる。尾崎は明治二三（一八九〇）年六月生まれ。むろん落合や丹羽らと同列ではない。尾崎の詳細な経歴は知らないが、彼は育英学校に教鞭をとったことがあるというから、そうした関係からの作品掲載や研究雑誌広告だったようにも想察される。

広告といえば同号には月刊雑誌『厥美』九月号のそれも所載されている。〈名古屋市東區松山二十四番地　日本臣道會〉の発行というから育英商業学校と係わりの深い刊行物と推察される。紹介の九月号内容には〈藝術の民衆化・尾崎久彌、親鸞復活の意義・中島慶治、日本臣道史論・尾崎久彌、實験体育談・日比野寛、手記より・長司春湖、わが夏・尾崎千代野、創作・雪を背景に・楓水小史、通俗日本臣道・日比野寛〉とあり、校長の日比野寛はじめ、尾崎、中島、長司ら『燃燒』関係者の名が少なくない。尾崎千代野は尾崎久彌夫人、楓水小史は尾崎の筆名のひとつである。

同号には清水芹畝軟集『人並の心』（育英文藝の會発行）の広告があり、また、「消息」欄には中島慶治について〈青山學院在學中の同氏は目下市内西區中村に帰省中〉と記されている。

（きのした　しんぞう）